

## Ireneで始まりIreneで終わる「平和の円環構造」 : George MacDonaldのPrincess二部作における女性像 と生

隈部, 歩  
西南学院大学 : 助教授

<https://doi.org/10.15017/4480681>

---

出版情報 : 九大英文学. 63, pp.31-71, 2021-03-31. 九州大学大学院英語学・英文学研究会  
バージョン :  
権利関係 :



Irene で始まり Irene で終わる「平和の円環構造」  
—George MacDonald の *Princess* 二部作における女性像と生—

隈部 歩

序論

George MacDonald 作品の女性像分析における問題点

George MacDonald (1824-1905)の作品には、超自然的な力を持った力強く印象的な女性が数多く描かれている。時にそれは主人公達を教え導く善良な賢女であり、時に破壊的な力を行使する宿命の女（ファム・ファタル）の様でもある。<sup>1</sup> MacDonald の生きたヴィクトリア朝（1837-1901）は女性への抑圧力が大変強い厳格な家父長制の時代であったため、男性作家である彼が強力な女性キャラクターを作品中に多数描いているのは注目に値しよう。しかしながら、これらの女性達は先行研究において十分に考察されて来たとは言えない。

MacDonald 作品の女性像を分析する先行研究には、主だった2つの傾向とそれによる問題点が見受けられる。1つ目の傾向は、宗教的観点による分析である。MacDonald は文筆業に入る前に牧師職に就いていたこともあり、自身の宗教観や死生観（死後にあるより豊かな生）を大人向け長編ファンタジー、フェアリーテール、説教集といった様々な作品の中に表しているため、実際、多くの研究が宗教的な立脚点から彼の作品を考察している。宗教的な研究では父なる神やキリスト的人物の重要性が強調されることで、MacDonald の作品は父—息子の男性原理に支配されたものとして捉えられ、女性が軽視されてしまう傾向にある。前述の超自然的で強力な女性像も、「神の女性化」や、父なる神やキリストの代理として見做されるに留まり、個々の女性について十分な考察がなされていない。

2つ目は、伝記的事実に重きを置く分析が挙げられる。女性像の考察にお

いて問題となるのは、MacDonald が 8 歳の時に最愛の母が亡くなったこと、そして彼が母の金髪の一房を生涯大切にしまっていたというエピソードに重きが置かれ、作品に表れる女性像に作者の母への思慕の念を過度に読み取ろうとすることだ。MacDonald 作品の最初の本格的な研究書である Robert Lee Wolff の *The Golden Key* が Sigmund Freud (1856-1939) の精神分析を用いたものであったことが象徴しているが、MacDonald が幼い頃に母を亡くしたという伝記的事実も手伝って、彼の作品の女性像が分析される際にはエディプス・コンプレックスの欲望の対象としての母存在が重視される傾向にある。そうすることで、MacDonald が実は多様な女性像を描いているという事実が見過ごされてしまっている。

前述した MacDonald 作品の女性像の分析における 2 つの問題に加えて、女性像の分析、特にヴィクトリア朝文学における女性像を分析する際の女性像の二極分化の傾向も、解釈の幅を制限する一要因だと言える。すなわち、特にヴィクトリア朝に顕著であった理想的な女性像「家庭の天使」とファムファタル（或いは売春婦）の二分化であり、女性像の分析においてはこれら 2 つのカテゴリーに無理やり分類するか、これらに分類されないものは考察の対象から外すといったことがなされがちである。<sup>2</sup> 更には、女性キャラクターに着目される場合、「成人した（或いはそれに近い）女性の男性との関わり」に焦点を置いて考察されることが多いため、少女や女性同士の絆が軽視され、見過ごされて来ているという問題点があり、これは MacDonald 作品の女性像分析にも当てはまる。

## MacDonald の *Princess* 二部作研究

上述した先行研究における問題点を受け、本稿では幼いお姫様が主人公である *Princess* 二部作（*The Princes and the Goblin* (1872) と続編 *The Princess and Curdie* (1883)）を取り上げ、これまで見過ごされて来た少女や女性同士の絆に着目する。それらを当時の社会状況やジェンダー観に照らすことで、MacDonald が「家父長制の男性作家」としては特異なジェンダー観を持っていたことを浮き彫りにすると共に、彼の作品を論じる上で最も重要なテーマの 1 つとされる死生観を女性像と結び付けて明らかにしたい。<sup>3</sup>

MacDonald の中期の代表作 *Princess* 二部作は、<sup>4</sup> お姫様 Irene と鉦夫の少年 Curdie の交流、そして不思議な魔力を持つ大祖母との関わりやそれを通した Irene と Curdie の成長の物語である。<sup>5</sup> *PG* では、Irene を攫って皇太子 Harelip の妻にしようと狙う地下に住むゴブリン達との戦いが、*PC* では王への謀反を画策する墮落した王国の人々との戦いが描かれており、Irene と Curdie が大祖母の助けを得て、お互いに補い支え合いながら、いかに困難を克服するかが物語の主軸を成している。

続編 *PC* は *PG* の 1 年後という設定であるにも拘わらず、2 つの作品の雰囲気は大変異なったものとなっている。特に、*PC* の結末は王家の断絶や王国の崩壊という悲劇的かつ破壊的なものであり、牧歌的で平和な雰囲気満ちた前作 *PG* とは別物だと思いたくなるような衝撃を読者に与える。そのため *PC* の結末について否定的な見解を示す研究者も多い。<sup>6</sup>

二部作間の劇的な変化の要因の 1 つは、作品上では 1 年の時間経過であるが、実際の出版には 11 年の開きがあることに求められよう。なぜなら、その間に MacDonald は死を意識するほどの重篤な病を経験しただけでなく、自身の愛する子供を亡くしており、これらの経験が陰鬱な *PC* の世界観の形成に影響したと考えられるのだ。<sup>7</sup> MacDonald の伝記作家 William Raeper は、

“Under MacDonald’s shining optimism there was always ingrained seam of the darkest pessimism, and doubts and despair hung about him. Now he only saw through a glass darkly—and the glass was very dark. MacDonald turned in on himself and brooded anxiously on his dead children.” (344)だと、この時期の MacDonald について指摘している。よって先行研究では、*Princess* 二部作は別個に論じられる傾向にあり、二部作がまとめて論じられる場合には作品間の差異に着目されて来た。特に焦点の置かれる相違点は大きく分けて以下の 2 点に集約できるだろう。

① *PG* と比較した上で、*PC* の結末を悲観的に捉えるもの。特に、この結末を作者 MacDonald の生命や人間性への悲観的な考えの表れだとする解釈。

② *PG* では支配的であった女性の繋がり（大祖母—Irene 姫）が *PC* では背景に引いてしまい、物語の主眼が大祖母と Irene 姫から大祖母と Curdie の関係や Curdie と国王の関係（国王への忠誠心）へとシフトし、Irene 姫ではなく

Curdie の成長物語になっていると捉えるもの。すなわち、女性的な世界から男性的、特に家父長的な世界に変わったという解釈。<sup>8</sup>

本稿の目的は、二部作を通した大祖母と Irene 姫の強固な結び付きの果たす役割を考察することで、先行研究で否定的に解釈されて来た本二部作の結末に新たな光を当て、MacDonald のジェンダー観や女性像、死生観を明らかにすることである。先行研究では大祖母の女神のような超自然性や全知全能性が注目されて来たが、<sup>9</sup> 本稿は大祖母が Irene 姫と血の繋がった実の祖先であることや 2 人が同じ Irene という名前であることに着目する。

Irene という名前はギリシャ神話の平和の女神 Eirene が語源であるため、彼女達は正に平和の象徴だと言える。<sup>10</sup> そこで、4 代前の大祖母の時代には平和であった国が、王家の没落や国民の墮落を経て、再び Irene 姫の時代で平和と王家の権威を回復するという Irene で始まり Irene で終わる「平和の円環構造」に本稿では注目する。その上で、「平和の円環構造」が Irene 姫で終わらせられていることの意味を考察し、2 人の Irene の結び付きや、Irene で始まり Irene で終わることを人間の有限の生に対応させる。すなわち、Irene と Curdie 夫妻に世継ぎが生まれず Irene の代で王家が断絶することは、人は誰しも最後に死を迎える存在であることの象徴であり、本二部作の描く大祖母 Irene で始まり Irene 姫で終わる王家 4 代には、間に停滞と墮落を挟みながらも、理想的状態で始まり、理想的状態を回復して終わる生の在り方が描かれていると本稿は解釈する。そうすることで、MacDonald の死生観を考察する上で見過ごされがちであるこの世の生と、軽視される傾向にある女性同士の絆とを結び付け、両方を浮かび上がらせる。

## I：大祖母と Irene 姫の結び付き—この世の生

‘Do you know my name, child?’

‘No, I don’t know it,’ answered the princess.

‘My name is Irene.’

‘That’s *my* name!’ cried the princess.

‘I know that. I let you have mine. I haven’t got your name. You’ve got mine.’

(PG 13、強調原文通り)

まず第 I 節では PG を扱い、「平和の円環構造」を創り上げる大祖母と Irene 姫の強固で密接な結び付きを明らかにし、彼女達の関係性とこの世の生との対応を示したい。物語は、“There was once a little princess whose father was king over a great country full of mountains and valleys.” (PG 5) というおとぎ話の常套句で始まる。母が病弱であったため、Irene 姫は誕生後すぐに母から引き離され、お城から離れた田舎の邸宅で使用人達に手厚く育てられた。父王は公務で忙しく、たまに娘の許を訪れるだけであった。この田舎の邸宅のある地域には、地下に狡猾な夜行性のゴブリンが住んでいたため、Irene 姫が日没後に外へ出ないように乳母が目を光らせていた。更に、姫には脅威の対象（ゴブリン）のことを知らせないように周囲の人々が細心の注意を払っていたため、幼い Irene 姫は危険に対して無知のまま、言わば温室の中で育てられているような状態だったのである。

両親、特に母の愛を知らずに成長した Irene 姫は愛情に飢え、自己というもの確立できておらず、アイデンティティーが希薄な、本当の意味では「生」と言えないような不活発な生を生きている。

She [Irene] got very tired, so tired that even her toys could no longer amuse her....  
[L]eaning with her back bowed into the back of the chair, her head hanging down,  
and her hands in her lap, very miserable as she would say herself, not even  
knowing what she would like,... (PG 8)

Irene 姫は倦怠感に苛まれ、でも何がしたいのかは彼女自身分かっていないという大変不活発な状態である。生命を与えてくれた母からの分断や母の愛を得られなかったことは Irene 姫の生にも影響を与え、それが生命力のない彼女の姿に表れているだろう。Irene 姫は墮落とは言わないまでも、生を停滞させてしまっている。<sup>11</sup> 更に、誕生直後に母親から離され、その後再び会うこともないまま彼女の母は亡くなってしまったので、姫には母親についての記憶すら無い (PG 90)。19・20 世紀の女性作家の作品を分析した Marianne Hirsh

は、19 世紀の作品における母娘の絆の不在を指摘しており、本作品での Irene の母の不在もその伝統に連なるものと考えられよう。Hirsh は家父長制社会において娘が「女」になるには、母娘の絆は断ち切れなければならない、母親の不在や沈黙はヒロインの成長の条件や物語の基盤に強固に結び付くものだとして述べている。<sup>12</sup> しかしながら、MacDonald は *Princess* 二部作において、単に母親をヒロインから切り離したのではない。彼は、Irene 姫の母の死を埋める存在一大祖母—との出会いもまた姫に与えており、彼女達は擬似母娘と見做すことのできる強固な関係性を結ぶことになる。

Irene 姫は *PG* の中で 4 回大祖母の部屋を訪問しており、Gaarden や Lesley Willis が指摘する通り、彼女は大祖母に会う度に成長を遂げる。<sup>13</sup> 姫は、大祖母との出会い以降、温室のような邸宅内から出て外界を知り、未来の夫となる Curdie に出会っただけでなく、無知のままであった脅威＝ゴブリンの存在を知り、実際に彼等と対決する。Irene 姫の乳母 Lootie は、姫の庇護されるべき未熟な子供時代の象徴だと考えられ、<sup>14</sup> 姫は Lootie が不在か彼女が眠りにについている時に大祖母に会いに行ったり、彼女の成長に必要な困難や危険に遭ったりしている。以下、Irene 姫の 4 度に渡る大祖母訪問について述べ、特に 2 人の密接な結び付きやそれがこの世の生に対応できることを表すと考えられる 3 回目と 4 回目の訪問については詳しく見てみたい。

Chapter 3 “The Princess and—We Shall See Who”での大祖母との初めての出会いは、孤独な少女のアイデンティティーの芽生えとして重要である。Irene 姫は或る日、高い塔へと繋がる階段を見付けてそれを上がり、塔の最上階に有る部屋へと辿り着き、そこで糸車の側に座って糸を紡いでいる美しい女性に出会う。その女性は MacDonald の描く他の女神的人物同様、老いと若さが混在した不思議な姿をしていた。<sup>15</sup> 大変美しく、肌も滑らかで一見すると若い女性なのだが、雪のように白い髪と深遠な知恵を湛えた瞳は彼女が長い年月を生きて来たことと示唆しており、Irene 姫は直観的にこの女性が“a very old lady” (*PG* 11)であると悟る。戸惑う姫に対し、女性は本節冒頭の引用のように自己紹介をする。Irene 姫が大祖母から名付けられたことや、2 人が同じ名前であることは、「平和の円環構造」を考える上で鍵を握る。この構造が表す「神の与えた元々の美しい生命の状態で死を迎える」ことは、「神の意図した元の存

在であること」とも言い換えられるが、MacDonald はそのことを説教集 *Unspoken Sermons* の“The New Name”において、人が神の意図した「真の名前」になると表現している。

The true name is one which expresses the character, the nature, the being, the meaning of the person who bears it.... Who can give a man this, his own name? God alone. For no one but God sees what the man is, or even, seeing what he is, could express in a name-word the sum and harmony of what he sees.... It is the blossom, the perfection, the completion, that determines the name; and God foresees that from the first, because he made it so;... Such a name cannot be given until the man is the name. (45 強調原文通り、下線引用者)

神の意図した「真の名前」については、Irene 姫が「平和の円環構造」を創り上げる上で重要な役割を果たすため、第 III 節にて再度触れることとする。

その美しい女性は、“I’m your great-great-grandmother.” (PG 13) と明かした上で、“I came here to take care of you,” “I’ve been here ever since you came yourself.” (PG 14) と姫に話す。これらの発言から、大祖母は Irene 姫の代理母的な役割を果たしていることが窺われ、彼女達を擬似的な母娘だと見做すことができよう。大祖母の言葉を聞いた Irene 姫は、自分がこの不思議で魅力的な女性にずっと守られ愛されていたことを知る。この事実の発覚は、母の愛を知らずに育った孤独な少女の心に開いた穴を埋める経験であり、Irene の生や成長の基盤となる。<sup>16</sup>

第 2 回目の大祖母訪問は Chapter 11 “The Old Lady’s Bedroom” でなされる。Irene 姫は、古い飾り棚 (an old cabinet) の中のものを触って遊んでいた時に、古いブローチで指を刺してしまう (PG 60)。その後夢の中でも痛みを苛まれていた姫は、夜中に目を覚まして大祖母の所へ行き、彼女に傷を癒してもらうのである。少女が針で指を刺し血を流すエピソードは Charles Perrault (1628-1703) や Grimm 兄弟の童話集に収録されている *Sleeping Beauty* を彷彿とさせる。これは思春期の到来 (月経の血を象徴) やセクシュアルな意味合い (性交による出血) として解釈されることが多く、少女の成長を促す一契機とな

る。Irene 姫の場合も、針で指を刺すエピソードは彼女の更なる成長を予感させるものであり、それは彼女の傷が大祖母への 2 回目の訪問を可能にさせたことにも表れている。しかしながら、*Sleeping Beauty* では王女は糸車で指を刺した途端に眠りに落ちて生を凍結させてしまい、彼女が目覚めて再び止まっていた生を動き出させるためには、ただ受動的に王子の訪れを待たなければならないのに対し、Irene 姫は自ら行動して王子(男)ではなく大祖母(女)の許を訪れている。また、Irene 姫は確かに、大祖母の部屋のベッドと一緒に眠るのであるが、これは *Sleeping Beauty* の王女の生を凍結させる眠りではない。Irene 姫の場合は生命力を与えられるものであり、一夜経って目覚めた後彼女の傷が完治しただけでなく、更に生き活きとした生命溢れる少女へと成長する。

Irene 姫の指の刺し傷やそれによる出血が第 2 回の大祖母訪問を可能にしていることから、この訪問においては彼女達の身体性に注目する必要がある。もちろん、先行研究が指摘する通り、大祖母との触れ合いを通じた Irene 姫の精神的な成長も考察すべきである。これは、Irene 姫が大祖母の存在を信じて夢ではないと思い続けられるかどうか、大祖母が彼女に課した一種の試練であったことにも表れており、先行研究が Irene 姫と大祖母の関係性を信仰心や人と神の関係性に結び付けて論じる 1 つの要因でもある。<sup>17</sup> しかしながら、このように神に結び付けられることの多い大祖母ではあるが、彼女は単に神秘的な超自然の存在ではない。Irene 姫との親密な身体的触れ合いの描写によって、彼女の人間的側面が表されているのである。Helena Michie は、ヴィクトリア朝の作品における女性の描写では、比喩の多用により身体性が奪われてしまっていると論じているが、<sup>18</sup> Irene 姫との触れ合いにおける大祖母の身体の直接的な表現は、彼女の身体性を保持すると解釈できよう。例えば、ブローチの針を刺して怪我をした Irene 姫の手に大祖母が軟膏を塗る場面では、彼女達の手の触れ合いが印象的に描かれている。

...Having examined it [Irene's hand], she [the great-great-grandmother] opened the casket, and took from it a little ointment. The sweetest odour filled the room—like that of roses and lilies—as *she rubbed the ointment gently all over*

*the hot swollen hand. Her touch was so pleasant and cool, that it seemed to drive away the pain and heat wherever it came.*

‘Oh grandmother! it is so nice!’ said Irene. ‘Thank you; thank you.’ (64, 強調引用者)

また、大祖母が Irene 姫を自身の胸に抱き寄せたり、姫にキスをしたり等といった親密な触れ合いが、姫に与える安心感や喜びと共に描かれている。

‘You sweet little pertness!’ said the old lady, and drew her towards her, and kissed her on the forehead and the cheek and the mouth. (PG 64)

The little princess nestled close up to the old lady, who took her in both her arms, and held her close to her bosom.

‘Oh dear! This is so nice!’ said the princess. ‘I didn’t know anything in the whole world could be so comfortable. I should like to lie here for ever.’ (PG 65)

‘Then good night,’ said the old lady, and kissed the forehead which lay in her bosom. (PG 66)

超自然的で女神の様に見做される大祖母であるが、Irene 姫の前では身体性が強調されているのは注目に値し、言わば Irene 姫が大祖母の人間的側面を露わにしているのである。<sup>19</sup> 更には、*Princess* 二部作を通して、特に PG において大祖母は全知全能の女神のように描かれているが、Irene 姫の安否を案ずる大祖母の姿は孫娘を心配する祖母のそれであり、Irene 姫は彼女の身体性と共に内面的な面でも大祖母の人間的側面を明らかにしている。<sup>20</sup> これは彼女達の結び付きを「この世の生」だとする本稿の主張を補強する事実だと言える。

次に、Chapter 15 “Woven and Then Spun”での3回目の訪問を見てみたい。この訪問の際に大祖母は Irene 姫に、最初の出会いの時も紡いでいた特殊な蜘蛛の糸で作られた糸玉を与え、姫がこの家に来た時からそれを紡いでいた

のだと告げる (PG 82)。糸紡ぎをする大祖母の姿は、ギリシャ神話の運命を司る女神 *Moirai* を彷彿とさせる。*Moirai* は「人間の運命、とりわけ人生の長さや死期を定め、見守る女神」(『世界女神大事典』 328-29)であり、紡ぎ終わった、或いは切られた糸は人間の運命や有限の生を表す。本節の最初に述べたように、*Irene* 姫が田舎の邸宅にやって来たのは彼女の誕生直後のことであったため、その時から大祖母が彼女のために紡いでいたというこの糸玉は、姫の生の象徴であると言えよう。更に、この時大祖母は糸玉に加えて、赤い宝石の付いた美しい指輪を *Irene* 姫に贈ったのであるが、この指輪は姫の母親の生前の持ち物であったことが後に父王により明らかにされる (PG 89)。*Irene* 姫は遂に母親に会うことは叶わなかったが、大祖母を通して姫が母の指輪を受け継いだことは、分断されていた母娘が繋がったことや、*Irene* 姫が真の意味で生命を母から受け取ったことを象徴する。それと同時に、この出来事は、大祖母と *Irene* 姫が擬似母娘関係を結んだことも表すだろう。<sup>21</sup>

大祖母は、指輪に紡いでいた糸の一方を結んで *Irene* 姫に渡し、もう一方を自身が持つことで、孫娘が緊急時でも糸を辿って自分の許へ辿り着ける様にする (PG 84)。この指輪と糸は、ゴブリンの企みを暴こうと彼等の居住地を探索する際に鉱夫の少年 *Curdie* が使っていた糸玉と比較すると、彼女達の結び付きの強固さが浮き彫りになる。*Curdie* は、糸の端を父の象徴、或いは男性性の象徴と見做せるつるはしに結び付けて、洞穴の入り口に突き刺すことで目印としていた。<sup>22</sup> 収穫の無い何度かの探索を経た後、或る夜の探索の時、ゴブリンの家畜達がつるはしを見付け、それを居住地に持ち帰ったので、彼はゴブリンの集会場へ迷い込んでしまう。そこで *Curdie* は、ゴブリン達の策略が *Irene* 姫を攫って皇太子 *Harelip* の妻にすることだと知り、当初の目的を達成したのであるが、彼の存在に気付いたゴブリン達に捕えられ、岩壁の穴の中に幽閉されてしまう。しかしながら、*Irene* 姫は、糸を辿って地下で迷ってしまった *Curdie* と対照的に、大祖母に繋がる指輪と糸のお陰で、地下に幽閉されてしまった彼を救い出したり、ゴブリン達が彼女を攫おうと邸宅を襲撃した際にも安全な場所へと導かれて危険を回避したりすることができたのである。*Curdie* の糸玉との比較に加え、<sup>23</sup> 母の指輪が重要な役割を果たすこと、そしてこの指輪を介して *Irene* 姫の生の象徴だと見做せる糸で大祖母と

姫が繋がれていることは、強固な女系の結び付きを表すと共に、<sup>24</sup> Irene 姫と大祖母の結び付きがこの世の生を体現することを象徴する。

最後に、Irene 姫の成長を決定的なものにした Chapter 22 “The Old Lady and Curdie”での第4回目の大祖母訪問について考察する。Irene 姫は或る日、彼女の生の象徴とも言える、大祖母の紡いだ糸に導かれて山へ登り、水の流れ出ている穴へと辿り着く。その穴の中へ入って行き、ゴブリン達に Curdie が幽閉されているのを知った Irene 姫は糸の導きに従って、そこから見事 Curdie を救い出すことに成功する。そして、Curdie が彼等を救い出した糸や、大祖母の存在を信じてくれないことに耐えられなかった Irene 姫は、大祖母の許へ一緒に来てくれるように彼を説得し、高い塔にある彼女の部屋を共に訪れたが、Curdie には大祖母が見えも聞こえもしなかった。そのため彼は Irene 姫が自分をからかっていると勘違いし、憤慨して塔を去るのだが、ここでの2人の対照性は、理性・現実／感情・神秘・想像力＝男性／女性というジェンダーの表れとして見做せるだろう。<sup>25</sup> そして Irene 姫や大祖母の体現する神秘や想像力は、その後 Curdie の成長を促すことから、本二部作においてそれらが重要な役割を担っていることが分かる。<sup>26</sup> また、この時 Irene 姫は大祖母の膝の上に乗っており、身体を密着させている様子が何度も強調されているので (“As she spoke she took the little princess in her arms and placed her upon her lap.” (PG 120)等)、前述した通り、2人の触れ合いにおいては彼女達の身体性が強調されてもいるのも注目に値する。

Curdie が塔を去った後、Irene 姫は底がないように思われる銀でできた不思議な楕円形の浴槽で水浴し、新生／真生とも言える経験をする。Irene 姫は、Curdie を救出しようと石や岩を取り除く過程で手が切れて血だらけになっただけでなく、追跡して来るゴブリン達から逃げるために狭い地下道を進んだせいでたいそう汚れていた。その姿を見た大祖母は、姫の傷を癒して綺麗にするために姫の服を脱がせ、浴槽へと抱きかかえて行く。Irene 姫はこの浴槽を第3回の訪問で見た時、中を覗き込んで “[I saw] The sky and the moon and the stars,” “It looked as if there was no bottom to it” (PG 81)と述べている。そのため、姫は大祖母が浴槽へと彼女を入れる前に、少し怯えた素振りを見せるものの、“Do not be afraid, my child”と大祖母に言われて “No, grandmother” (PG 124)と答

え、その次の瞬間姫は澄んだ冷たい水の中に入っていた。

When she opened her eyes, she saw nothing but a strange lovely blue over and beneath and all about her. The lady and the beautiful room had vanished from her sight, and she seemed utterly alone. But instead of being afraid, she felt more than happy—perfectly blissful. And from somewhere came the voice of the lady, singing a strange sweet song, of which she could distinguish every word; but of the sense she had only a feeling—no understanding. Nor could she remember a single line after it was gone. It vanished, like the poetry in a dream, as fast as it came. (PG 124)<sup>27</sup>

水の中で目を閉じ、至上の幸福を感じている Irene 姫の様子は、まるで胎児に戻ったような状態であり、彼女が聞いた大祖母の歌は、母親が未だ見ぬ我が子に対して歌う歌のようでもある。Irene 姫が大祖母の歌の言葉を判別せず理解できないが、感情に訴え掛けられているのも、姫が言わば胎児の状態に戻っており、この浴槽が子宮の象徴であると示唆する。

浴槽から出て “as if she had been made over again” (PG 125)と感じている Irene 姫は、多くの研究者が指摘するように、この水浴びにより新生の体験をしたことが窺われる。<sup>28</sup> それだけでなく、母親から真の意味で生命を受け継いでおらず不活発な生を生きていた Irene 姫は、大祖母との出会い以降生命力を得て生き生きとした少女となったため、この経験は「真生（真の誕生）」とも取れるだろう。加えて、不思議なことに、水浴後の Irene 姫の様子として“Every bruise and all weariness were gone, all her hands were soft and whole as ever.” (PG 125)だと述べられている。大祖母の許への第3回・4回訪問の両方で Irene 姫が血を流していること、そして大祖母が彼女の傷に触れて癒しているのは、彼女達の身体性の強調や、特に姫の身体性・有限性を象徴する。<sup>29</sup>

全4回の大祖母の部屋への訪問の後、Irene 姫が Chapter 24 で初めて自らの家の者達に指示を出した姿には Lootie からの自立が読み取れ、“Irene Behaves Like a Princess” という章題が示す通り、彼女はこの時点で一人前の王女となったのだと考えられる。<sup>30</sup> 不活発な生を生きていた Irene 姫は、大祖母との

出会い以降、生命力溢れる活発な少女になっただけでなく、彼女との触れ合いを通して、自身で物事を決断できるまでに成長したのである。*PG* の結末で、王が乳母の Lootie を後に残したまま姫を連れて城へと出発したことや、続編 *PC* ではもはや Lootie が全く登場しないのは、姫の未熟な子供時代の終焉と自立、そして彼女の更なる成長の可能性を示すだろう。また、*PG* の結末で Irene 姫が Curdie にキスをしたことも、彼女が幼年時代から思春期へと一歩踏み出したことを表す。このキスは、以前 Chapter 6 にて Irene 姫が、Lootie と共に日暮れ後道に迷った時に Curdie が助けてくれて、純粋な感謝の気持ちから “I’ll give you a kiss when we get home” (*PG* 31) と言って彼にした約束を守ったものである。これは約束の順守を重要視する姫の人間性を表すエピソードでもあるが、姫の未熟な子供時代の象徴である Lootie が Curdie へのキスを禁じていたことを考え合わせると、この結末部は Irene 姫が大人の女性への第 1 歩を踏み出したことを表し、彼女の成長（とその可能性）を指し示すものと言える。<sup>31</sup> しかし、「平和の円環構造」を創り上げるために、Irene 姫は更なる成長を遂げ、大祖母の体現する「平和」を回復させる存在へとならなければならない。

## II : 分断された 2 人の Irene の再結合—王家・王国とこの世の生

第 I 節では大祖母と Irene 姫の繋がり与此の世の生との対応について論じたが、第 II 節では 4 世代に渡る王家においても「平和の円環構造」を成り立たせる 2 人の Irene が繋がる必要性を示したい。そのために、Irene 姫の母の死や 2 人の Irene の分断が、王家の没落や国民の墮落を引き起こす要因であったことを考察し、それらを人の生における停滞や墮落に対応させる。また、2 人の Irene を繋ぐ上で重要な役割を果たす鉱夫の少年 Curdie を、MacDonald の理想的な生命の姿への考え—神の下では男女は皆平等であり、生命の与え手である神の許へ帰るその日まで助け合って生きる必要が有る—の一表現として取り上げる。そして最終的に、王家の流れにおいて大祖母と Irene 姫が再び繋がったことを明らかにする。

*PG* の結末で、王が乳母の Lootie を田舎の邸宅に残したまま Irene 姫を連れて都へと向かったことは、Irene 姫の自立と成長の可能性を表すと前節で述べ

たが、2人の Irene が引き離されたことは、PG 冒頭で述べられていた Irene 姫と母の分離の再現だと見做すこともできる。Irene 姫の更なる成長のためには、大祖母を介して母と繋がったことと同様に、大祖母と繋がる必要性が有り、前節で述べた個人的なレベルを超えた大きな文脈でそれがなされねばならない。ここで重大な役割を果たすのが Curdie である。

Irene 姫が王と共に都へと発って暫くした後、Curdie は大祖母に“you will find, as you go on, and as you need to know, what you have to do.” (PC 224)と言われ、都 Gwyntystorm へと派遣される。そこで彼は都での人々の墮落や争いの蔓延、王室内での王に対する謀反（王殺害）の画策、王の深刻な病について知り、王や Irene 姫を救うことが大祖母に託された自身の使命だと悟る。前作 PG では、王は威厳ある理想的な統治者として描かれていたため、PC における彼のこの極端な変化や、国民の墮落が何を意味するかは、PC を読み解く鍵となるだろう。Raeper が、王の病を人々の“moral disease” (330)の象徴だと見做している通り、王と王国の状態はリンクしていると言える。また、Geoffrey Reiter は、ダーウィニズムの影響によりヴィクトリア朝後期の人々の間に最も流布した恐怖の1つが退化（degeneration）であったと述べ、Princess 二部作において“MacDonald uses the notions of evolution and degeneration to great effect.” (217)と指摘している。本稿では Reiter の「退化」についての論を踏襲しつつ発展させ、国民や王家の状態を人の生における停滞や墮落に対応させる。

王は、Curdie に自身の病や国民について以下のように語る。

The king told him [Curdie] that for some years, *ever since his queen's death, he had been losing heart over the wickedness of his people*. He had tried hard to make them good, but they got worse and worse.... The main cause of his illness was the despondency with which *the degeneration of his people* affected him. (PC 290, 強調引用者)

第I節にて、母の死が Irene 姫の生の力を弱める一要因であったと述べたが、それと同様に、Irene 姫の母（王妃）の死が国民の墮落やそれへの心労による

王の病を引き起こしていることは注目に値しよう。つまり、Irene 姫の母の死が、姫個人にだけでなく、王家や国民にも生の停滞をもたらしているのである。

王家に対応させたこの世の生においても、Irene 姫個人の生と同様に、姫と大祖母の結び付きが重大な役割を果たすのだが、王国という大きなレベルで考える時には、Curdie の存在も必要となる。或る日、地下の坑道で仕事をしていた Curdie と彼の父 Peter Peterson は、光り輝く女神のような姿の大祖母と出会った。その時彼女は Peterson 家が実は王家の血を引いていることを彼等に明かす。

And now I am going to tell you what no one knows but myself: *you, Peter, and your wife have both the blood of the royal family in your veins. I have been trying to cultivate your family tree, every branch of which is known to me, and I expect Curdie to turn out a blossom on it.* (PC 208, 強調引用者)

王家の家系 (family tree) に花を咲かせるように期待されている Curdie は、Irene 姫と共に平和を回復することで、姫と大祖母が「平和の円環構造」を成り立たせる上での重大な役割を果たすことになる。

MacDonald が Irene 姫を、白雪姫や眠り姫に代表される古典的でステレオタイプの「王子の訪れや救われることをただ待つだけの姫」ではなく、積極的に行動する少女として描いているのは、彼が同時代の男性作家よりも進んだジェンダー観を持っていたことを表すだろう。特に、Irene 姫がゴブリンによって地下に幽閉された Curdie の命を救い出したエピソードは、「英雄が姫を救い出す」というおとぎ話のプロットを完全に覆している。<sup>32</sup> 更に、このエピソードをギリシャ神話における冥界の王 Hades に攫われた娘 Persephone と彼女の母である豊穡の女神 Demeter の物語に結び付けると、MacDonald が本作品で女性の繋がりを重視していたことが浮かび上がってくる。地下に住むゴブリンの皇太子 Harelip が Irene 姫を妻にしようと誘拐を企てたことには、ギリシャ神話で Hades が Demeter の娘 Persephone に恋をし、花を摘もうとしていた彼女を地下へと攫って妻にしたエピソードとの類似を

見ることができよう。<sup>33</sup> そして、糸で Irene 姫 (Persephone) を導き、Harelip (Hades) に攫われるのを未然に防いだ大祖母を Demeter として見做すことができる。<sup>34</sup> 或いは、Harelip (Hades) 達が姫を攫うために邸宅を襲撃した際、Irene 姫は大祖母の糸に導かれて Curdie の家の所へ行き、母性的な Curdie の母 Joan に守られていたため、Joan を Demeter と見做すこともできよう。ギリシャ神話では、Persephone は Hades に攫われてしまい、母娘の牧歌的繋がりが異性愛の侵入により引き裂かれてしまうが、PG では 2 人の女性 (Demeter) が Persephone を Hades から守った、と読むことができる。Irene 姫が積極的に行動する少女であることに加えて、このエピソードにおける MacDonald のギリシャ神話のアダプテーションに目を向けると、彼が本作において女性の繋がりをや力を強調していることが浮かび上がって来る。<sup>35</sup>

Irene 姫が Curdie を救い出したエピソードについて述べたが、彼はただ Irene 姫に救われるだけでなく、二部作を通して彼女を支え、助けている。むしろ PC では Irene 姫の行いよりも大祖母に課せられたミッションを遂行する Curdie の姿に重きが置かれており、二部作で補い合う男女の姿が描かれていると言える。MacDonald が *Princess* 二部作を執筆していた 19 世紀後半、女性は無力な存在だと見做されていたが、本節の最初に述べたように、彼は神の下では男女は平等だと考えていた。MacDonald の伝記を著した Raeper によると、MacDonald は自身を Plotinus (205 頃-270) や Origen (185 頃-254 頃) のような新プラトン主義に連なるものだと認識しており、彼は “Men and women were born out of the heart of God, not *ex nihilo*, as traditionally held by the church” (243) と人間の創造について考えていた。つまり、MacDonald の信条においては、男女共に神の the heart から産まれたため優劣はなく、平等なのである。更に MacDonald は、女性に対して神秘的な畏敬の念 (mystical awe) を持っており、女性を “an erotic angel, mediating her influence through nature, who aroused man’s senses and turned him back to God” (Raeper 261) だと見做していた。<sup>36</sup> このように MacDonald は、女性を単なる受け身の存在ではなく、男性の魂の伴侶となるべき対等の存在だと捉えていたのだ。彼は単にジェンダー役割を逆転させるだけではなく、補い合って成長する男女の姿を作品に描いている。これは本二部作における作者の生への考えの一表現だと見做せるだろう。<sup>37</sup>

PC は PG から僅か一年程しか経っていないという設定であるにも拘わらず、先述の通り 2 作品の間には大きな変化が有り、これは Irene 姫にも当てはまる。あどけない少女であった Irene 姫の大人びた姿を語り手は“*She was only between nine and ten, though indeed she looked several years older, and her eyes almost those of a grown woman, for she had had terrible trouble of late.*” (PC 267) だと評している。病んでしまった父王を献身的に支えるその姿はもはや子供＝princess ではなく、妻＝queen であるような印象をも読者に与える。墮落した国民の影響を受けず、純真無垢なままの Irene 姫の存在のお陰で、心労により心身共に病み、更には王殺害が画策されているにも拘わらず、王は何とか生き延びられていたのである。PG の結末部で、Irene 姫の更なる成長の可能性が示唆されていた通り、彼女は空白の 1 年の間に大きな成長を遂げたことが窺われる。しかしながら、Irene 姫は自身の未熟さや力不足を痛感し、“*It is so sad he [the king] should have only me and not my mamma! A princess is nothing to a queen!*” (PC 270, 強調引用者) と取るに足らない自身の存在を母と比べて述べている。

PG では、Irene 姫の信じる力や従順さは彼女の美德として描かれているだけでなく、彼女のみ大祖母との触れ合いを許される要因でもあったが、<sup>38</sup> PC ではこれらの特徴は裏目に出てしまい、Irene 姫は宮廷人達の企みに気付けなくなってしまう。従って、Irene 姫の更なる成長には、Curdie の力が必要となる。大祖母の薔薇の炎で手を焼かれたことにより、触ることで相手の真の姿を見抜く力を身に着けた Curdie は、廷臣達の真の姿を見抜いて Irene 姫の目を「開かせる」。これは、PG にて Irene 姫が神秘・想像力・信じることの重要性を Curdie に教え、彼の成長を促したことに対応しているだろう。Gaarden は、“*Curdie, the miner boy, is a pragmatist whose competence in and orientation to the outer world complements Irene’s enclosed mysticism.*” (136)だと指摘している。彼等がお互いの成長を促したこれらのエピソードには、想像力と理性の融和の重要性—どちらが上という訳ではなく、両方が必要であること—が示されており、2 人の補い合う関係性は二部作を通して描かれているのである。<sup>39</sup>

王は、謀反を画策して王殺害を企む宮廷人達から隔離され、Irene 姫と

Curdie の手厚い看護を受けたお陰で少しずつ回復し、或る夜 Curdie に彼の今までの生涯について話すよう乞い願った。Curdie は王の命に従い、思い出せる限りの彼の生涯や父と母のこと、山での生活、ゴブリンの企みを暴くための冒険について話していたが、彼の話が Irene 姫と出会った時点に至ると、それを姫が引き継いだ。

When he came to finding the princess and her nurse overtaken by the twilight on the mountain, *Irene took up her share of the tale, and told all about herself to that point, and then Curdie took it up again; and so they went on, each fitting in the part that the other did not know, thus keeping the hoop of the story running straight;*... At last, with the mission given him by the wonderful princess [the great-great-grandmother] and his consequent adventures, Curdie brought up the whole tale to the present moment. (PC 298, 強調引用者)

Irene 姫と Curdie の補い合う関係性が、それぞれの人生や経験を分担しながら、1 つの物語として紡いでいることに表れている。彼等の話を聞いた王は “Now at last, my children, I am compelled to believe many things I could not and do not yet understand” (PC 298) と述べ、自身の幼い頃の或る出来事について話し出す。

‘[The king is compelled to believe] things I used to hear, and sometimes see, as often as I visited my mother’s home. Once, for instance, I heard my mother say to her father—speaking of me—“He is a good, honest boy, but he will be an old man before he understands,” and my grandfather answered, “*Keep up your heart, child: my mother will look after him*”....’ (PC 298-99, 強調引用者)

王の祖父が言及した、王の面倒を看てくれるであろう「私の母」とはすなわち大祖母のことである。王は上で引用した発言に続けて、大祖母にまつわる多くの不思議な出来事を母の家で見たり聞いたりしていたにも拘わらず、理解できないために考えるのを止め、次第に大祖母のことを忘れたと 2 人に伝

える (PC 299)。王は、Irene 姫が生まれた際に、大祖母に同じ名前を娘に付けて良いか尋ねているため、<sup>40</sup> 彼は以前大祖母とコンタクトできていた—彼女の存在を信じていた—ことが分かるが、後に成長した Irene 姫から塔に住む“the Queen Irene”のことを知っているか尋ねられた時、静かに“No”と答えている (PG 56)。この時、王は驚いて不思議な表情を浮かべて Irene 姫を見詰めていたことから、大祖母の存在が心に引っかかっていることが窺われるが、彼の中から大祖母の存在は徐々に抜け落ちて行っていたのである。しかしながら、王は自身の娘 Irene 姫と Curdie の話を聞いたことで大祖母のことを鮮明に思い出し、彼女の存在を再び信ずるようになった。王による大祖母の存在の否定は、2 人の Irene の分断の象徴だと言え、そして今王が大祖母の実在を認めたことは、王家の家系においても大祖母と Irene 姫が繋がったことを示す。

### III. Irene で始まり Irene で終わる—「平和の円環構造」と生

第 I 節では大祖母と Irene 姫が個人的に繋がったことを、第 II 節では王家 4 代の流れにおいても分断されていた 2 人の Irene が繋がったことを考察し、彼女達の結び付きがこの世の生に対応することを述べた。本節では、Irene 姫が大祖母の体現する平和を真の意味で達成させて、「平和の円環構造」を創り上げることを分析し、それが作者の理想的な生命の在り方を表すものであることを明らかにしたい。

先行研究は、PC では前作に見られた Irene 姫と大祖母の密接な結び付きが背景に引いてしまい、焦点が Irene 姫（と大祖母）から Curdie にシフトしているとしばしば指摘しているが、彼女達の強固で密接な結び付きは、これから本節で論じる通り二部作を貫いている。たとえ表面化していなくても、彼女達の関係性は、大祖母が Irene 姫のために紡いだ大変繊細で目には見えない糸のように、確かに繋がっているのである。その重要性は、Gwyntystorm の墮落した国民の中で異彩を放つ老婆 Derba とその孫娘 Barbara の存在によって暗示されている。Derba は、よそ者ということで住民達から酷い仕打ちを受けた Curdie を家に入れて手厚くもてなす善良な女性であり、孫の Barbara の純粹無垢な姿は PG の Irene 姫を彷彿とさせる。Barbara の親が既に他界し

ているため、彼女が祖母の庇護下にあることや祖母からとても愛されていること、王の心身の健康に良い影響をもたらすこと、<sup>41</sup> そして Barbara が他者よりも密に大祖母と交流できると示唆されているのは、<sup>42</sup> 彼女と Irene 姫との共通点である。大祖母と Irene 姫の関係性を彷彿とさせる 2 人の人物が、人々の墮落・停滞した生の影響を受けずにいることは、大祖母と Irene 姫の繋がりが PC でも重要な役割を果たすことを示すものだと考えられる。

墮落した Gwyntystorm の人々が王には強い反感や嫌悪を示しているにも拘わらず、興味深いことに、彼等は Irene 姫には希望を見出している。

[People of Gwyntystorm thought that] Mad or wicked, he [the king] was not only unfit to rule any longer, but worse than unfit to have in his power and under his influence *the young princess, only hope of Gwyntystorm and the kingdom.* (PC 321, 強調引用者)

これは墮落、或いは停滞してしまった生の回復の可能性を Irene 姫が秘めていることを示唆する。そしてそれを達成するためには、Irene 姫が真の意味で大祖母の体現する平和の存在となる必要がある。

第 II 節で引用した、王が大祖母の実在を認めたあの夜の出来事の後、大祖母は実際に彼の許に現れる。或る日の真夜中、突然目を覚ました Curdie は、王の寝室で強力な古代の女神 (Titaness) を思わせる姿の大祖母が、祭壇に立ってテーブルの上に王を寝かせ、薔薇の炎で彼を焼いて儀式を行っている光景を目撃する。

A long and broad marble table, that stood at one end of the room, had been drawn into the middle of it, *and thereon burned a great fire, of a sort that Curdie knew—a fire of glowing, flaming roses, red and white. In the midst of the roses lay the king, moaning, but motionless....*

*Then Curdie, no longer dazzled, saw and knew the old princess [the great-grandmother].* The room was lighted with the splendor of her face, of her blue eyes, of her sapphire crown. Her golden hair went streaming out from her

through the air till it went off in mist and light. *She was large and strong as a Titaness*. She stooped over the table-altar, put her mighty arms under the living sacrifice, lifted the king, as if he were but a little child, to her bosom, walked with him to the floor, and laid him in his bed. Then darkness fell. (PC 326-27, 強調引用者)

Soto は、この光景はギリシャ神話で地母神 Demeter が、娘 Persephone の探索の途中でエレウシスの宮殿に滞在した際、彼女が幼い王子 Demophoon を不死にするために、毎夜暖炉の火に入れていた儀式を彷彿とさせると指摘しているが、<sup>43</sup> 本稿ではむしろ第 I 節でも触れた Irene 姫の真の誕生を思わせる大祖母の部屋での水浴に類似するものとして捉えたい。王の場合は、墮落や停滞した生命を浄化されるために、水では無く炎が用いられ、Irene 姫の時より強力なイメージを以て新生／真生が描かれている。この光景を目撃した Curdie は“All was safe; all was well.” (PC 327) だと思い、全身で安心感を覚える。翌朝、王の病は完治し、元の堂々たる威厳を湛えた人物に戻っており、著しい生命力の回復を示す。そして、王は忠実な部下の Sir Bronzebeard や Curdie、そして Curdie が旅の途中に出会った異形の者達 (Uglies) と協力し、墮落した国民が謀反を起こすために迎え入れた敵国の兵士達を見事に撃退し、国内の争いも無事に鎮圧する。王が理性で理解できないもの—大祖母の存在—を信じられなくなったことは、前作 PG での大祖母に対する Curdie と Irene 姫の対照的な姿と同様に、現実・理性／神秘・想像力＝男性／女性というジェンダーの一表現として捉えられる。その後、再び彼女の存在を信じるようになった王の許に大祖母が現れて、この不思議な儀式を施して王を回復させたことは、大祖母や Irene 姫の体現する神秘や想像力が Curdie の成長を促したことと同様に、本二部作における彼女達の存在や体現するものの重要性を示すものである。

女性が戦争に参加することは一般的にはないので、2 人の Irene が敵国の兵士や墮落した国民との戦いの際に戦場に居合わせているのは特筆すべきである。特に、王が未だ 9 歳の幼い少女である娘の Irene 姫を戦場に連れ出してその勝利を共に分かち合わせたのは、彼女が王家の力や平和の回復に必要で

あることを表すだろう。更に、大祖母は女中の姿に変装してこの戦に実質的に参加する。

A dense cloud came over the sun, and sank rapidly towards the earth. The cloud moved ‘all together’, and yet the thousands of white flakes of which it was made up moved each for itself in ceaseless and rapid motion: *those flakes were the wings of pigeons. Down swooped the birds upon the invaders; right in the face of man and horse they flew with swift-beating wings, blinding eyes and confounding brain....*

... Strange also it seemed that the maid [the disguise of the great-great-grandmother] should be constantly waving her arm towards the battle. *And the time of the motion of her arm so fitted with the rushes of birds, that it looked as if the birds obeyed her gesture, and she were casting living javelins by the thousand against the enemy.* The moment a pigeon had rounded her head, it went off straight as bolt from bow, and with trebled velocity. (PC 334-35, 強調引用者)

大祖母が武器による攻撃の代わりに、平和の象徴とされる鳩を用いて目くらましをして敵兵を敗走させたことは、彼女が平和を司る存在であると明らかに示している。また、戦いの最中 Irene 姫の乗るポニーが暴走して戦場から出て行こうとした時に、大祖母がそれを止めて 2 人で戦いの結果を見守っている (PC 334)。彼女達の姿から、「平和の円環構造」を創り上げるために、大祖母が Irene 姫にこの戦いを共に見届けさせようとしたことが窺われる。この戦いでの勝利の後、王国は再び健全で正しいものとなり、王家は力を取り戻した。その後成長した Curdie と Irene 姫は結婚し、王の死後彼等は王と王妃になる。彼等の治世は、“Gwyntystorm was a better city, and good people grew in it.” (PC 341)だと書かれており、平和な善い世であったことが分かる。

物語の結末部で、Irene 姫 (Princess Irene) が王妃 (Queen Irene) になったことは重要な意味を持つ。<sup>44</sup> なぜなら、人々から多くの様々な名前と呼ばれていた大祖母の「真の (正しい) 名前」が“Queen Irene”だということが、最終

章でわざわざ明記されているからである。<sup>45</sup>大祖母は、名前と衣服を結び付けて(“dresses are only names” (PC 209))、常に変わらない中身を飾る表面的なものだと見做していたが、“*Queen Irene—that was the right name of the old princess [the great-great-grandmother]—was thereafter seldom long absent from the palace.*” (PC 340, 強調引用者)だと明かされている。よって、Irene 姫が結末部で Queen Irene になることにより、大祖母の「真の名前」を受け継いだことが分かる。Irene 姫が、元々大祖母が“Queen Irene”だと知っていたことも、彼女達の特別な関係性を示す特筆すべき事実である。<sup>46</sup>そして更にここで鍵を握るのは、第 I 節で引用した MacDonald の説教集 *Unspoken Sermons* 中の神の与えた真の名前についての言葉と、第 II 節で引用した大祖母が Curdie に期待した役割についての言葉だ。特に重要な部分のみ再度引用する。

The true name is one which expresses the character, the nature, the being, the meaning of the person who bears it.... It is the blossom, the perfection, the completion, that determines the name; and God foresees that from the first, because he made it so;... Such a name cannot be given until the man is the name. (*Unspoken Sermons* “The New Name”45, 強調原文通り、下線・太字引用者)

I have been trying to cultivate your family tree, every branch of which is known to me, and I expect Curdie to turn out a blossom on it. (PC 208, 下線・太字引用者)

Irene 姫は Curdie と共に平和な世を築いたこと、そして大祖母の“the right name” (PC 340)である Queen Irene になることにより、真の意味で大祖母の体現している平和の存在となったのだ。大祖母が Curdie に語った「王家の家系に花を咲かせること」は、「平和の円環構造」を成り立たせることであったと言えるだろう。真の名は、“the man is the name” (*Unspoken Sermons* 45, 強調引用通り)になるまで与えられないが、Irene 姫は Curdie と共に平和を達成させて王家の家系 (family tree) に花を咲かせ (turn out a blossom)、自身の名前が意味する「平和」、大祖母の体現する「平和 (Irene)」に実質的なことにより、

花 (the blossom) とも表現される真の名を受け継いだのである。

先行研究が指摘するように、PC では大祖母と Irene 姫の結び付きは目に見える形でははっきりと現れないが、PC でも続く彼女達の強固な結び付きは実は PG で予め示されている。以下の引用は、第 I 節でも言及した、Irene 姫の新生／真生を思わせる水浴の後に語り手が述べたことである。

In after years, however, she would sometimes fancy that snatches of melody suddenly rising in her brain, must be little phrases and fragments of the air of that song; and the very fancy would make her happier, and abler to do her duty. (PG 124-25)

Irene 姫は成長して以降も、大祖母との絆、とりわけ彼女に新生／真生するのを可能にさせた水浴で、いわば胎児の様な状態になっている時に聞いた大祖母の歌が彼女を幸せな気持ちにし、自身の使命をしっかりと果たせる様になっている。姫が Queen Irene になるまで具体的に何をしていたか、詳細は PC では明確に描かれていないものの、彼女達の強固な絆は、大祖母が姫に紡いだ繊細で目に見えないが決して切れない強力な糸のように結ばれており、Irene 姫の成長を後押ししていたのである。そうして、Queen Irene から Queen Irene へと、「平和の円環構造」が遂に創り上げられたのだ。

Irene 姫と Curdie に世継ぎが生まれず王家が断絶したことは、PC の結末の陰鬱な雰囲気を助長するものだと見做されて来たが、これも「大祖母と Irene 姫の繋がりが有限であるこの世の生を表す」とする本稿の解釈の根拠となる。なぜなら、これは神の永遠性との対比として読めるからである。ヨハネの黙示録 (1,8) にて、神は自身を「アルファでありオメガである」、つまり「始めであり終わりである」と称しており、これは神の永遠性を表している。<sup>47</sup> それに対して *Princess* 二部作では、始めと終わりが2人の女性で表されており、「終わり」の Irene 姫の死が明確に述べられている (“But they [Irene and Curdie] had no children, and when they died the people chose a king.” (PC 341, 強調引用者)) ことで、人間の生の有限性が強調されていると言えるだろう。

神の永遠性との対比と別の側面からも、大祖母と Irene 姫の繋がりをこの

世の生だと読むことができる。生命を産み出す性の縦の繋がりである母娘関係、言い換えると、「産み出されたもの自身が、更なる生命を産み出す可能性を秘めた」この関係性は生命の永遠なる繋がりを思わせるが、大祖母と Irene 姫の疑似母娘関係においては、Irene が世継ぎを産まないことにより有限性が強調されているのだ。MacDonald の生きたヴィクトリア朝は、財産が父から息子へと受け継がれる長子相続の制度が取られていたが、Simone de Beauvoir はこれを家父長制における男性の「永遠の生」への欲望、つまり、自分の存在を財産に移行して転換し、それが死後も自分を映すと見做す個人、すなわち息子に所有されることにより疑似的に永遠に生きることへの欲望と関連付けている。また Adrienne Rich は、男性が女性を受胎させる能力に気付いたことや、<sup>48</sup> 彼等の財産の所有と死を超越する欲望が重なったことが、現在見られる父権制による家族制度を発達させたのだと指摘する。

... the owner transfers, alienates, his existence into his property; he cares more for it than for his very life; it overflows the narrow limits of his mortal lifetime, and continues to exist beyond the body's dissolution—the earthly and material incorporation of the immortal soul. But this survival can only come about if the property remains in the hands of its owner; it can be his beyond death only if it belongs to individuals in whom he sees himself projected, who are *his*. (Beauvoir 82, 強調原文通り)

At the core of patriarchy is the individual family unit which originated with the idea of property and the desire to see one's property transmitted to one's biological descendants.... A crucial moment in human consciousness, then, arrives when man discovers that it is himself, not the moon or the spring rains or the spirits of the dead, who impregnates the woman; that the child she carries and gives birth to is *his* child, who can make *him* immortal, both mystically, by propitiating the gods with prayers and sacrifices when he is dead, and concretely, by receiving the patrimony from him. At this crossroads of sexual possession, property ownership, and the desire to transcend death, developed the institution

we know: the present day patriarchal family... (Rich 60-61, 強調原文通り)

これらのことを考慮すると、大祖母と Irene 姫の疑似母娘関係は、生命を産み出せない父—息子間の富の相続による疑似的な永遠の生を反転させたもののだと考えられ、Irene 姫の代での王家の断絶を限りある「この世の生」と対応させて読むことの妥当性を証明するだろう。つまり、作者 MacDonald は、*Princess* 二部作において、生命の永遠なる繋がりの可能性を秘めた女系の繋がりを取り上げ、それを敢えて終わらせることで、彼の有限の生への考えを描き込んでいたのである。

王家が断絶した後、人々は選挙により新たな王を選ぶのだが、彼等はまた人間の持つ墮落への強い傾向を示すこととなる。新王の即位後、国民は金銭欲に取りつかれて地下の黄金を過剰に採掘して、土台まで崩してしまう。それが原因で都市は或る日の正午突如崩壊し、王国は人々の叫び声と共に川の流れに飲み込まれて消滅するという破壊的な結末を迎えたのだ。Irene 姫に世継ぎが生まれなかったことや王国の崩壊は、本稿でこれまで何度も述べた通り、先行研究が PC を否定的に評する大きな要因であった。<sup>49</sup> しかしながら、これらは人々の墮落のし易さや正しく生きることの難しさを表すと共に、大祖母の血の重要性を強調しており、Irene で始まり Irene で終わった 4 世代の王家を際立たせている。平和の象徴である大祖母 Irene で始まった王家が、人々の墮落や王家の没落を経た後に Irene 姫の代で再び回復して終わること—「平和で始まり平和で終わる円環構造」が出来上がっていること—は、生命の与え手である神の許へ自身の生命を返すその時まで、もし道を誤ったり生を停滞させたりしてしまったとしてもそれを改め、生命を歩み通さねばならないという作者 MacDonald の生への考えとして読むことができるのである。<sup>50</sup>

## 結論

本稿では、先行研究で大祖母の女神を思わせる超自然性がクローズアップされることで見過ごされて来た彼女に関する事実—彼女が Irene 姫の実の祖先であること—to 着目し、彼女と Irene 姫の結び付きの重要性を明らかにし

た。そして、2 人の Irene の関係性がこの世の生に対応していると指摘することにより、否定的に解釈されて来た PC における王家の断絶や王国の崩壊に新たな光を当てた。更には、「平和の円環構造」を成り立たせる 2 人の関係性が二部作を通して鍵を握っていると明らかにすることで、PC では希薄になったと見做されて来た大祖母と Irene 姫の関係性の変わらない強固さを示し、本作品における女系の重要性を浮き彫りにした。女性像を考察する上で軽視される傾向にある少女や女性同士の関わり、いわば「見えない、語られない存在達」に注目することで、MacDonald の死生観が鮮やかに立ち現れて来たと言えよう。<sup>51</sup>

J. R. R. Tolkien の“Death is the theme that most inspired George MacDonald.” (68) という言葉が象徴するように、MacDonald 作品ではもっぱら死や死後にあるより豊かな生に着目される。しかしながら、大祖母と Irene 姫の繋がりを、たとえそれが表面には表れていない時でも注意深く見ようとし、そしてそれをこの世の生に対応させることにより、作者がいかに生を捉えていたかが浮き彫りになった。MacDonald は、限り有る生を生きる人間は弱く、墮落したり生を停滞させたりすることもあるけれども、そうであっても誰しも向上する可能性を持っているし、<sup>52</sup> そうするべきであると考えていたのではないだろうか。Irene で始まり Irene で終わること、すなわち *Princess* 二部作における「平和の円環構造」を創り上げた強固な女性の結び付きは、神に与えられた美しく活力溢れた生命をそのままに、神の許に返すその日まで生き抜かねばならないという、作者の理想的な生の在り方への強い意志を表しているのである。

## 註

<sup>1</sup> 超自然的な力を持った力強く印象的な女性は MacDonald 作品の多くに散見される。善良な賢女の例としては *Phantastes* (1858) の小屋に住む若い目をした老賢女や“*The Golden Key*” (1867) の Grandmother、*The Wise Woman* (1875) の the Wise Woman 等が挙げられ、本稿で扱う *Princess* 二部作に登場する大祖母は主人公を導く賢女の筆頭である。

またファム・ファタルに連なる強力な女性としては、例えば *At the Back of the North Wind* (1871)の North Wind や *Lilith* (1895)の Lilith が挙げられる。彼女達は共通して、若いと若さの共存という特徴を持っているが、それぞれが異なる印象的な描写がなされているため、単純に「神の女性化」と見做したり、善良な女／悪女として二分したりするのではなく、個々に注意深く考察する必要がある。本稿はその試みの 1 つとして大祖母についてフォーカスしたものであり、彼女と Irene 姫の絆の重要性を明らかにする中で、彼女について考察する。

<sup>2</sup> 「家庭の天使」という性を感じさせず、清らかな家の守り手である良妻賢母を指す呼称は Coventry Patmore (1823-96) の長編詩 *The Angel in the House* (1854-62) から取られている。

<sup>3</sup> 以下、本稿での引用は *The Princess and the Goblin* と *The Princess and Curdie* を同時収録した Oxford UP 版によるものとし、引用の際には丸括弧内にタイトルの略称 (*The Princess and the Goblin* は PG、*The Princess and Curdie* は PC) とページ数を示す。なお、両作品に言及する際には *Princess* 二部作と表記する。

<sup>4</sup> 2 つの作品を合わせて *Curdie books* と言及される場合もあるが、この作品の本質を捉えられていないと考えられる上、本稿は Irene 姫と大祖母 Irene の女系の繋がりに主眼を置いているため、*Princess* 二部作という呼称を用いる。

<sup>5</sup> 大祖母(the great-great-grandmother)は、Irene 姫の四世代前の実の祖先（父の母の父の母）であり、超自然的な魔力を持つ女神の様な存在として描かれている。孫娘と同じ Irene という名前であり、Irene 姫が育った邸宅にある塔の最上階に住んでいる。

<sup>6</sup> 例えば“[MacDonald is] convinced that evil triumphs in the end” (Wolff 176), “[PC’s ending is] a choking pessimistic gloom” (Wolff 178-79), “The ending is startling bleak” (Prickett 168), “this is the Last Judgement. But it is a very strange Last Judgement: no one is saved” (Carpenter 84) といった指摘がある。更に Bonnie Gaarden は、MacDonald 作品においては稀である陰鬱な PC の結末について“*Curdie is the only one of his fantasies that focuses on the fate of a society, and the apocalyptic nature of the tale reveals the limit of its author’s optimism*” (159) だと分析している。

<sup>7</sup> MacDonald は生涯を通して、結核や喘息等の病気に悩まされていたが、特にこの期間は病状が悪化していたため、死を意識することが多かったと考えられる。また、1878 年 4 月 27 日には、Ted Hughes (MacDonald 作品の挿絵画家 Arthur Hughes の甥) と結

婚間近であった次女 Mary が 24 歳の若さで亡くなり、更に翌年 2 月には、MacDonald の“favorite son”だとされ、*At the Back of the North Wind* (1871) の Diamond のモデルだとも指摘される四男の Maurice も 15 歳で早世した (Raepers 342, 345)。MacDonald は義母に宛てた手紙の中で “Neither Louisa nor I knew much about death till those two were taken from us within the year—and now we know its terror and its comfort” (Raepers 344) と述べており、2 人の子供の死が彼に死について熟考させたことが分かる。

<sup>8</sup> PG と PC の相違点について、女性的な世界から男性的、特に家父長的な世界に変わったと指摘する例としては、McGillis, Nancy-Lou Patterson の論を参照。また Joseph Sigman は本二部作を Curdie の成長の物語だと評している。本稿では、先行研究が続編 PC にて男性的な視点 (家父長的、Curdie の成長) に移ったと解釈することで見落とししていた、二部作を貫く Irene 姫と大祖母の関係性を明らかにするものである。

<sup>9</sup> 大祖母を神のように見做し、Irene 姫と大祖母を人間と神の関係性で読んだ論としては、特に、Maria Gonzalez Davies や Gaarden, Daidre Hayward の論を参照のこと。また Raepers も、大祖母を “a face of God, loving and motherly” だと指摘し、MacDonald が *Adela Cathcart* (1864) の中で神を “Him who is Father and Mother both in one” 呼んでいたことに言及している (262)。また、Lesley Willis は大祖母をキリスト的人物だと見做している。確かに、これらの論が主張するように、MacDonald が自身の信ずる慈愛に満ちた神 (またはキリスト) を表すために、女性 (母的) 存在として作品に描いたとする解釈は重要である。しかしながら、本稿はこれらの解釈に依拠しつつも、これまで見過ごされて来た大祖母の人間側面や、二部作を通じた彼女の Irene 姫との結び付きについて考察し、見え難い女性像や生を浮かび上がらせるものである。

<sup>10</sup> 平和の女神 Eirene については『世界女神大事典』292 を参照。

<sup>11</sup> MacDonald は成長が止まった、或いは成長を阻害された少女を自身の数多くの作品で描いている。例えば、*Phantastes* (1858) の珠を持った乙女、“The Light Princess” (1864) における魔女の呪いにより身体的な重さと精神的な重々しさの両方を奪われた主人公の姫、“The Carasoyne” (1867) で妖精の取り換え子となった少女 Fairy、“The Day Boy and the Night Girl” (1879) で地下墓地に閉じ込められて育てられた Nycteris 等が挙げられ、これらの少女達は、MacDonald の少女の成長への高い関心を表すだろう。加えて、Sally Mitchell は、1870 年頃に「少女時代 (girlhood)」という概念が確立され始め、その後小説にも少女が多く登場するようになったと述べていることから (1)、丁度その時期に

当たる *Princess* 二部作の少女像の分析は重要である。“The Day Boy and the Night Girl” と *Phantastes* における少女像の分析については拙論“To ‘Go Out’ and See the World through Innocent Eyes: The View of Life and Death in George MacDonald’s ‘The Day Boy and the Night Girl’”、「珠を持った乙女の成長—George MacDonald の *Phantastes* における女性像と死生観」を参照。

<sup>12</sup> Hirsh 43-67 参照。

<sup>13</sup> Gaarden 126-27, Willis 28 参照。

<sup>14</sup> Patterson は “[Lootie] represents Irene’s childhood dependency and is thrown off rather like an outworn garment when the Princess leaves that childhood behind.” (180) と述べている。

<sup>15</sup> MacDonald は、“God is life, and the will-source of life” (“Life” 163)と *Unspoken Sermons* で述べており、我々が神に真に近付くならば若さを保てる、或いは若返ると考えていた。これは単に身体的な意味ではなく、精神的な「若さ」「生命力」である。彼のこの考えは、複数の作品に表れる大祖母のような高齢にも拘わらず若く美しい女性達の姿 (*Phantastes* (1858)の Anodos の妖精の祖母、“The Golden Key” (1867)の Grandmother、*Lilith* (1895)の Lilith と Eve 等) に表されている。加えて、“The Golden Key”で主人公達が出会う 3 人の老賢人が、より賢く年老いた人物ほど若く描かれており、最も賢く老いた The Old Man of Fire がキリストを彷彿とさせる赤子の姿で登場していることにも MacDonald の「若さ／老い」への考えが如実に表されている。

<sup>16</sup> Willis は、Irene 姫が大祖母は彼女の血の繋がった実際の祖先であり、自分を見守りお世話するために田舎の邸宅へやって来たのだと発見したことは、“To the self-centered consciousness of a child this is more surprising as a discovery than as a fact, but the reassurance gives her the confidence to begin loving in her turn.” (27)だと指摘している。自信を持つことや自分を認め愛することは、人のアイデンティティー形成に欠かせない要素であるため、大祖母は Irene 姫の心に開いた穴を埋め、彼女のアイデンティティーを確立させて成長を促すのに欠かせない存在であると言える。

<sup>17</sup> 第 2 回訪問の際に、Irene 姫は大祖母から“This night week you must come back to me”, “The only question is whether you will believe I am anywhere—whether you will believe I am anything but a dream” (65)と言われていたのに、日が経つにつれて姫は大祖母の存在を夢ではないかと疑うようになる。大祖母の存在を信じ続けられるかは、彼女が姫に課した一種の試練 (“one trial” (PG 65)) だとして描かれていることから、姫の精神的成

長や信仰心、そしてそれを介した大祖母との絆が本作品において鍵を握ることが表れている。

<sup>18</sup> Michie 79-123 参照。

<sup>19</sup> 大祖母に大変似た存在の例として、*Phantastes* (1858)の主人公の青年 Anodos の母方の祖先とされる妖精の祖母が挙げられるが、彼女達の主人公に対する反応は実に対照的である。大祖母と Irene 姫は親密で、身体的な触れ合いをするのに対し、妖精の祖母は Anodos が腕を広げて彼女に近寄った時、“Foolish boy, if you could touch me, I should hurt you. Besides,... a man must not fall in love with his grandmother, you know.” (5) と言って彼を窘める。Anodos の場合インセストタブーの問題が見え隠れするが、Irene 姫と Anodos のそれぞれの祖先に対する関係性は似ているため、この対照的な描写は注目に値しよう。*Phantastes* では妖精の血筋が女系のものだと示唆されており、女性の繋がりは重要だと考えられる。よって、作者 MacDonald が本二部作にて、Anodos には許されなかった女性の祖先との密接な結び付きを通して何を表そうとしていたのか考察する必要があるだろう。

<sup>20</sup> 大祖母は物事を予見し、主人公達の運命に関わったり、彼等を教え導いたりする様子も描かれてはいるが、彼女はしばしば先行研究が指摘する全知全能の神のような存在であるとは完全には言えない。Irene 姫を糸によって導き、ゴブリンに閉じ込められた Curdie の許へ向かわせたのは大祖母本人であるが、彼女は Irene 姫が無事に戻って来ることを予見できず、Curdie を伴って塔に会いに来た姫に対して“I’ve been waiting for you, and indeed getting a little anxious about you, and beginning to think whether I had not better go and fetch you myself.” (PG 120)と姫の身の安全を案じていたことを話している。Irene 姫との関わりにおいては、先に述べた身体性と同様に、彼女の人間的側面が明らかにされているのである。

<sup>21</sup> 大祖母に指輪をもらった翌日、乳母の Lootie に“How your ring does glow this morning, princess!”と言われた姫は、不思議なことに“Who gave me the ring, Lootie? I know I’ve had it a long time, but where did I get it? I don’t remember.” (PG 88)と答えている。ここで Irene 姫が、大祖母の存在を信じてくれない Lootie に対して嘘をついたのかどうかははっきり分からないが、Lootie は “I think it must have been your mother gave it you, princess” (PG 88)と述べ、その後父王が“It was your queen-mamma’s once” (PG 89)と姫に話している。指輪の元の所有者とそれを姫に譲渡した人物の位置に大祖母と母が居ることになり、

大祖母はここで Irene 姫の擬似的な母であると共に、姫と母を結ぶ役割を果たしている。Davies も本稿と同様に、このエピソードについて大祖母が Irene 姫の母の場所に位置していると指摘しており、“That she [the great-great-grandmother] is the Great Mother archetype is made clear when she takes the place of Irene’s mother. She gives Irene a ring and Irene’s nurse Lootie believes the child had been given it by her mother.” (61)と述べている。

<sup>22</sup> Curdie の父 Peter も鉱夫であり、Curdie は父から鉱山や鉱夫の仕事の多くを学んでいるため、つるはしは彼にとって父の象徴であると言えるだろう。また、山や大地を擬人化した印象的な描写のなされる *PC* の Chapter 1 にて、大地や山が母（女性）と見做され、鉱夫達がつるはしや鋤を用いて中を掘り起こし、彼女の持ち物を贈り物として持ち帰る様子が描かれていることから（*PC* 175）、本二部作においてつるはしは男性性の象徴でもある。

<sup>23</sup> Curdie の糸玉は、ゴブリンの居住地の探索から帰る度に、元に戻せない程絡まっていたが、彼が眠っている間にいつも母 Joan がそれを元通りにしていた。混沌とした状態から再び Curdie を導く目印となる状態に糸を戻す Joan の姿は、糸によって Irene 姫を導く大祖母と同様に、「導き手」としての強い女性像を指し示すだろう。

<sup>24</sup> MacDonald の生きたヴィクトリア朝社会は、女性への抑圧力の強い父－息子の男性原理の支配するキリスト教社会であることに加えて、親族関係や財産の授受が父系によって組織される厳格な家父長制であった。そのため、女性の繋がりは軽んじられ、背景に引いてしまいがちであった。本稿は、擬似的なものも含め、軽視される母－娘の結び付きに注目して、MacDonald の生への考えや、彼が「家父長制の男性作家」としては特異なジェンダー観を持っていたことを浮き彫りにする。

<sup>25</sup> 一般的に、理性・現実／感情・神秘・想像力＝男性／女性というジェンダー化された図式がよく見られ、特に、理性に重きが置かれ始めた 19 世紀には、女性を感情的なものや謎めいたものとして見做す傾向が強かった。この場面での Irene 姫と Curdie の対象的な描写は上述の図式を表しているだろう。先行研究では、超自然的な存在である大祖母を（女）神と見做し、彼女を見ることができかどうかを神への信仰心と結び付けて論じられることもあるが、今述べたジェンダー観も考慮に入れる必要がある。本稿は、大祖母と Irene 姫の密接な結び付きを、ジェンダー化された図式に関連させると共に、彼女達の体現するものの重要性を宗教的観点以外から考察する。

<sup>26</sup> 神秘や想像力は Curdie の成長に欠かせない一要素であることから、これらが本二部

作において重要なテーマであることは明らかである。しかしながら、第 II 節で述べるように、MacDonald は女性側とされる神秘や想像力を単純に女性に割り当てているわけでもなく、それらを一般的に男性が体現するとされる理性や現実より上位のものと描いてもおらず、両方の必要性を述べている。男女の単純な二分化や序列化を避けているのも、MacDonald の特徴の 1 つと言えるだろう。

<sup>27</sup> MacDonald を自身の“master”として尊敬していた C. S. Lewis (1898-1963)は、彼を Franz Kafka (1883-1924)や Novalis (1772-1801)のような神話的物語を創り上げる天才 (genius) として高く評価していた。しかしながら、その一方で Lewis は “If we define Literature as an art whose medium is words, then certainly MacDonald has no place in its first rank—perhaps not even in its second.” (XXVIII) と述べ、MacDonald の手法は “undistinguished, at times fumbling” (XXIX)であると見做していた。McGillis は、Lewis によるこの有名な MacDonald 評価に異を唱えるために、本文中で引用した Irene 姫の水浴の場面を取り上げている。McGillis は、この場面から読み取れる様々な可能性—Novalis への言及、フェアリーテールを感情や音楽的な経験として見做していた MacDonald の考えとの関連、他の作品にも見られる“epiphany”の瞬間、そして注意深い散文のリズム—を挙げ、MacDonald が自身の作品について自意識的であると述べる。そうすることで彼は「神話作家 MacDonald」という Lewis の評価とは異なる、「優れた書き手 MacDonald」像を提示している (McGillis xii-xiii 参照)。本稿は、Irene 姫の水浴シーンを彼女の新生／真生の象徴として取り上げているが、この場面は書き手 MacDonald の評価としても重要な場面であることを付け加えておく必要があるだろう。

<sup>28</sup> 多くの先行研究が、本稿と同様にこの場面を Irene 姫の新生と結び付けて論じている。特に、Willis 33 や Holbrook 110 を参照のこと。また、PG の Irene 姫の水浴のように、MacDonald は他の作品でも生命 (新生) と水を結び付けて描いている。例えば、“The Golden Key” (1867)における Mossy と Tangle の水浴は、Irene 姫と同じく新生の象徴として描かれている他、“The Light Princess” (1864)では、主人公の姫の生命力が湖と密接に結び付けられている。

<sup>29</sup> Irene 姫がブローチの針で指を刺して血を流したエピソードは、本文でも述べた通り眠り姫との関連をしばしば指摘されるが、先行研究では第 4 回大祖母訪問時に Irene 姫の手が血だらけになっていることは見過ごされている。このエピソードは彼女の身体性を強調するだけでなく、彼女が Curdie を救出するために力仕事をしたことを表し、

Irene 姫がステレオタイプの姫ではないことを表すものとして大変重要である。

<sup>30</sup> 大祖母の存在を信じることのできない Lootie は、“How *could* you get under the clothes like that, and make us all fancy you were lost! And keep it up all day too! You *are* the most obstinate child! It’s anything but fun to us, I can tell you!” (PG 134, 強調原文通り)と姫への愛情ゆえに叱り、彼女の言葉に耳を傾けようとしなない。よって Irene 姫は、Lootie は想像力の欠如により真実を理解することができないのだと理解し、乳母から自立することを決意したのである。本作品では、PG での大祖母に対する Irene 姫と Curdie の対照的な態度により、女性／男性＝神秘・想像力／現実・理性という図式が表されている。この図式は Curdie の母が大祖母のランプを見たことや、大祖母を見ることができる幼い少女 Barbara のエピソードにより補強されている。しかしながら、想像力は単純に女性側が体现するものである訳ではないことが Lootie の姿から読み取れる。そして Lootie の姿は、Irene 姫と大祖母の想像力も介して結び付けられた強固な結び付きを際立たせている。また MacDonald は現実・理性／不思議・想像力を単純に男女で分けていないことに加えて、後に考察するように、これらのどちらかを上位に置いて描いている訳でもない。これは、彼のジェンダー観が、当時のステレオタイプのものから一歩進んでいたことの一表現として取れるだろう。

<sup>31</sup> PG 結末部で Irene 姫が Curdie にキスをしたのは、彼女の人間性（約束の順守の重要視）や彼女のプリンセス観（“a princess must *not* break the word” (PG 33)) を表すものであり、姫はキスする時に“There’s the kiss I promised you!” (PG 160)と Curdie に言っている。しかしながら、それと同時に、このエピソードは Raeper が“The book [PG] ends with her [Irene’s] first erotic kiss, showing her approach to the threshold of womanhood.” (328)と指摘する通り、Irene 姫の成長を示唆するものでもある。

<sup>32</sup> MacDonald は、同時代の人に比べて進んだジェンダー観を持っており、それは彼の作品中に何度も登場する力を持った女性（例えば *At the Back of the North Wind* (1871) の North Wind や *Lilith* (1895) の Lilith や Mara 等）や、対等な男女の姿 (*Princess* 二部作の Curdie と Irene 姫に加え、“The Golden Key” (1867) の Mossy と Tangle や “The Day Boy and the Night Girl” (1879) の Photogen と Nycteris 等)、同性愛的な関係性（男性の同性愛的関係は *Wilfrid Cumbermede* (1872)、女性の同性愛的関係は *Mary Marston* (1881) に描かれている）に見ることができる。同性愛的な関係性については、Raeper 206-07 も参照。また、*Princess* 二部作におけるジェンダー表象の逸脱については Anna Wing Bo

Tso の論を参照のこと。

<sup>33</sup> Patterson は、Irene 姫が重要な場面で何度も庭に戻って来ることに言及して、“The floral motif offers a first and central parallel with the figure of Persephone, the Kore of the myth.” (170)と指摘している。Fernando Soto は、MacDonald はギリシャの神話や宗教に関心を持っており、“His allusion to Greek myths and religions range from superficial references to full-blown creative reinterpretation of some very obscure, ancient stories.” (65)と述べて、*Princess* 二部作、特に *PC* において作者が Kore (Persephone)の神話をいかに用いているかを明らかにしている。

<sup>34</sup> Persephone に恋した Pluto (Hades) は Zeus の助力を得て、彼女を密かに攫った。それを知った母 Demeter は娘を救い出すために世界中を探し回って豊穡の女神としての自身の役割を放棄し、大地に実りがもたらされず荒廃してしまった。Zeus はその後 Pluto に Persephone を母の許へ返せと命じたが、彼は Persephone が母の許に長く留まらないように石榴を与え、何も知らずにそれを食べてしまった Persephone は 1 年の三分の一を Pluto と共に過ごさねばならなくなった (アポロドーロス 36-37 参照)。PG における Demeter と Persephone の物語の重要性については Patterson の論を、*PC* における重要性については Soto の論も参照のこと。

<sup>35</sup> 本稿では Irene 姫を Persephone、Harelip を Hades として捉え、姫が攫われるのを未然に防いだり、守ったりしていた大祖母と Joan を Demeter として見做し、PG における女性の繋がり的重要性を指摘した。しかしながら、PG にはギリシャ神話に依拠した別の可能性も指摘できる。すなわち、Irene 姫が地下に幽閉された Curdie を救い出しているため、Irene 姫が Demeter で Curdie が Persephone という図式にもなっているのである。このように考えた場合、MacDonald の当時としては特異な、進んだジェンダー観の一表れとしても読むことができるだろう。

<sup>36</sup> 確かに、MacDonald が女性をステレオタイプの「天使」という言葉を使って表現しているのは、彼もまた当時流布していた女性像「家庭の天使」を理想化しており、伝統的な女性観・ジェンダー観を持っていたことを表しているかもしれない。しかしながら、彼は男女を平等な存在だと考えるだけでなく、女性を男性を導く存在としても見做していたため、当時としては進んだ考えの持ち主であったと言えよう。加えて、MacDonald の考えでは、女性として現された(revealed)神の姿は“not only Father, but Mother, or rather Grandmother, that is, Grand Mother” (Raepier 261)であった。これは彼の複

数の作品における超自然的な女性の姿に表されており、*Princess* 二部作の大祖母はその筆頭である。

<sup>37</sup> MacDonald の妻 Louisa は、ヴィクトリア朝の理想的な女性像：良妻賢母「家庭の天使」に通ずる所があったが、意志が強く決断力の有る女性であり、彼女は MacDonald の当時としては「進んだ」女性観の形成に影響を及ぼしていたと考えられる。彼女は当時の女性としては珍しく本を出版し（*Chamber Dramas for Children* (1870)）、夫 MacDonald が病気の時は、娘達と共に家族で演劇を企画する等してお金を稼いでいた。MacDonald は妻を魂の伴侶と見做しており、説教集 *Unspoken Sermons* を彼女に捧げていた。更には、MacDonald は女子教育に高い関心があり、女子大学 Bedford College で教鞭を取ったり、異母姉妹の Louie を励まして Bedford College に進学させたりした。確かに、彼が四女 Irene を the Slade School of Art に通わせた以外、自分の娘達に高等教育を施さなかったのには問題がある。Raepier は“it seems that MacDonald needed his own daughters to help run the family enterprise.” (260)と述べている。しかしながら、MacDonald が女性の地位向上や成長に関心を持っていたことは、注目すべき事実である。

<sup>38</sup> *PG* では、Curdie が目の前に居る大祖母の姿が見えず、声も聞こえない様子が、大祖母の膝の上に座って言葉を交わす Irene 姫の親密な姿と対照的に描かれていたのは前述の通りである。また、大祖母は邸宅内の高い塔の最上階に住んでいるにも拘わらず、家の者は誰も彼女の存在を知らないと彼女は姫に述べている（*PG* 14）。

<sup>39</sup> MacDonald は、相反するものの融和の必要性を度々作品の中で印象的に描いており、このテーマが彼にとって重要な意味を持つことが窺われる。それが最も顕著に表れているのは、昼しか知らない少年 Photogen と夜しか知らない少女 Nycteris が登場する“The Day Boy and the Night Girl” (1879)であろう。

<sup>40</sup> 大祖母との初めての出会いの場面で、大祖母の名前が自分と同じだと知って驚いている姫に対して、彼女は“Your papa, the king, asked me if I had any objection to your having it; and of course I hadn't. I let you have it with pleasure.” (*PG* 13)と話している。

<sup>41</sup> 王は、誰かが王から王位を剥奪しようとする悪夢に毎夜悩まされ、Irene 姫は夜に彼の許から離れられない状態であったが、Barbara が王の部屋に来て以降、彼女を腕に抱かせるとたちまち彼の悪夢は消えた。また、王殺害を企む墮落した廷臣に囲まれたせいで、王位＝王冠に過度に執着していた王であったが、Barbara の良い影響のお陰でそれも消え、王冠を彼女の遊び道具として与えている（*PC* 320-21）。

<sup>42</sup> *PC* の結末部で、王達が墮落した国民の謀反や他国軍を鎮圧して平和を取り戻した後、大祖母はめったに城を離れなかったとあり、善良な城の人々の前に彼女は姿を表していることが分かるが、時折、誰も彼女の所在が分からない時があった。しかしながら、“Once or twice when she was missing, Barbara, who seemed to know of her sometimes when nobody else had a notion whither she had gone, said she was with the dear old Ugliers in the wood.” (*PC* 340)と描かれており、これは *PG* にて Irene 姫のみ大祖母と密に交流できていたことを彷彿とさせる。

<sup>43</sup> Soto 66-68 参照。

<sup>44</sup> MacDonald は、特に *Lilith* (1895)において慎重に“princess”と“queen”を使い分けていた。*Lilith* は自身を“queen”だと見做してたが、主人公の青年 Vane を始め、周囲の人々は彼女を決して“queen”とは呼ばず“princess”だと考えていた。*PC* では、Curdie や彼の父 Peter が大祖母のことを“the old princess”と考えているのに対し、実際は“Queen Irene—that was the right name of the old princess” (*PC* 340)と書かれており、MacDonald がこの2つの単語の使い分けに意味を持たせていたことが分かる。

<sup>45</sup> 大祖母は、見る者によって姿や名前が変わっている。例えば、地下の鉱脈で光り輝く女神の様な姿の大祖母と出会った Curdie と彼の父 Peter は彼女を“the Lady of the Silver Moon” (208)と呼び、想像力に欠けた粗野な人々は彼女を邪悪な魔女だと見做して“Old Mother Wotherwop”と呼んで貶す。そして、Irene 姫は彼女の美しい大祖母を単に“grandmother”と呼んで彼女に対して敬意と愛情、信頼を持っている。見る人によって姿形が変わるこの特徴は *At the Back of the North Wind* の North Wind にも見られる。大祖母のこの変幻自在な特徴は、彼女の持つ超自然性を強調するものだと見做されがちであるが、それと同時にこれは人々の内面を映す鏡の様な役割を果たしていると言いうこともできるだろう。つまり、大祖母は鏡の役割を果たして、見る人に自身の生を直視させる存在でもあるのだ。

<sup>46</sup> Irene 姫は、父王が邸宅を訪れた時、彼に“I should like you to take me to see my great old grandmother.”と言った後、“I mean the Queen Irene that lives up in the tower—the very old lady, you know, with the hair of silver.” (*PG* 56)と説明している。Irene 姫は、大祖母が自身の直系の祖先だと聞いていた為、“You must be a queen too, if you are my great big grandmother.” (*PG* 14)と考えるのは自然なことかもしれないが、多くの名を持つ大祖母の“the right name” (*PC* 340)である Queen Irene を、Irene 姫がいち早く口にしていたのは

重要だろう。

<sup>47</sup> アルファとオメガは、ギリシャ語アルファベットの最初と最後の文字であるため、この言葉は神の永遠性を表すものである。「始めと終わり、アルファとオメガ」については、ルルカー 286-88 を参照。MacDonald 自身も、神のことを“him who is *the first and the last and the living one.*” (*Unspoken Sermons* “Life” 170、強調原文通り)と表現している。

<sup>48</sup> 未だ医学が発達していなかった古代では、女性が妊娠する原因は人々に知られておらず、Rich が言及しているように、月の光や春の雨、精霊等といった神秘的な理由により女性は妊娠するのだと考えられており、子供を産む女性の身体は男性から畏敬の念を持って見られていた。やがて男性は、女性を妊娠させるのは「自分自身」なのだと気づき、産まれた子供、特に息子を自身の複製だと見做すようになる。Rich が指摘する通り、この発見は家父長制を発達させる 1 つの要因であったと言えるだろう。

<sup>49</sup> 例えば、Soto は、本稿と同様に本作品の主人公の姫と大祖母の名前が、ギリシャ神話の平和の女神 Eirene に由来する Irene であることの重要性を指摘しているが、彼は PC の性質を理解する上でそれは役に立たないと述べ、PC における平和の欠如や、復讐と破壊に支配された世界観について言及している (Soto 70)。

<sup>50</sup> MacDonald のこの生への考えは、説教集 *Unspoken Sermons* の“Life”で述べられた、人は自身を産み出した生命の源である神の許へその生命を返す時まで悪に対する善なる行いをし、向上し続けねばならないこと、“to restore to the beginning the end that comes of that beginning—to be the thing the maker thought of when he willed, ere he began to work its being.” (163、強調引用者)せねばならないことに表れている。また、同説教集内の“Self-Denial”でも、人が常に向上して生きる必要性や、神の意図する存在である／になるべきことが述べられている (195-205)。更に、*Lilith* (1895)では、邪悪な存在として描かれる Lilith に対して元夫 Adam が “Repent. I beseech thee; repent, and be again an angel of God.” (149)と懇願していることや、後に Mara に鏡で “a form of splendid beauty”を見せられた Lilith が“the one that God had intended her to be, the other that she had made herself” (204)を知ったことから、彼女が神の意図した善なる存在から大きく逸れてしまったことが分かる。しかしながら、彼女は悔い改めて神の許へ帰るための眠りを許されてもいる (219)。Lilith の姿は、たとえ生きて行く上で道を誤ったとしてもそれを改め、神に意図された美しく清らかな姿で生命を返せるように生きねばならないし、悔い改める可能性を誰しも持っているという MacDonald の考えを映している。

<sup>51</sup> MacDonald は、牧師職を追われた後も、自身の信条を多くの作品で表しており、また自身の説教をまとめて *Unspoken Sermons* として出版している。「公では語ることでできなかったもの／語られなかったもの」の重要性を込めて彼は自身の著作にこのタイトルを付けたと思われる。従って、彼の作品の中に表された、当時「語られなかった／見えなかった」者達に注目するのは大変意義があると言えよう。

<sup>52</sup> McGillis は、“MacDonald did hold unorthodox theological opinions”だと指摘した上で、“like Origen, [MacDonald] believed in the ultimate salvation of the Devil” (viii)だと述べている。MacDonald のこの考えは、厳格なカルヴァン主義と対立するものであり、彼が牧師職を追われる一因となってしまうが、その後も彼は自身の著作の中でそれを表し続けた。*Princess* 二部作においても、生前過ちを犯した者達が異形の者(Uglies)となり、良い行いをすることで救われるだろうことが描かれている。

## 参考文献

- アポロドーロス『ギリシャ神話』高津春繁訳、東京：岩波書店、2012年。
- Beauvoir, Simone de. *The Second Sex*. Trans. H. M. Parshley. NY: Knopf, 1953.
- Carpenter, Humphrey. *Secret Gardens: The Golden Age of Children's Literature*. Boston: Houghton Mifflin, 1985.
- Davies, Maria Gonzalez. “A Spiritual Presence in Fairy Land: The Great-Great-Grandmother in the Princes Books.” *North Wind: A Journal of George MacDonald Studies*. 12 (1993):60-65.
- Gaarden, Bonnie. *The Christian Goddess: Archetype and Theology in the Fantasies of George MacDonald*. Madison: Fairleigh Dickinson UP, 2011.
- Hayward, Deidre. “The Mystical Sophia: More on the Great Grandmother in the *Princess* Books.” *North Wind: A Journal of George MacDonald Studies*. 13 (1994): 29-33.
- Holbrook, David. *A Study of George MacDonald and the Image of Woman*. Lewiston: Mellen, 2000.
- Kumabe, Ayumi. “To ‘Go Out’ and See the World through Innocent Eyes: The View of Life and Death in George MacDonald’s ‘The Day Boy and the Night Girl’” *Kyushu University*

Review. No. 58 (2016): 37-56.

---. 「珠を持った乙女の成長—George MacDonald の *Phantastes* における女性像と死生観」『Tinker Bell 英語圏児童文学研究』No. 62 (March 2017):49-63.

Lewis, C. S. *George MacDonald: Anthology 365 Readings*. 1946. NY: Harper Collins, 2001

ルルカー、マンフレート『聖書象徴事典』池田紘一訳、京都：人文書院、1988 年。

MacDonald, George. *The Princess and the Goblin and The Princess and Curdie*. 1872, 1883. Ed.

Roderick McGillis. Oxford: Oxford UP, 1990.

---. *The Complete Fairy Tales*. Ed. U. C. Knoepfelmacher. London: Penguin, 1999.

---. *At the Back of the North Wind*. 1871. Ed. Roderick McGillis and John Pennington. Peterborough: Broadview, 2011.

---. *Lilith*. 1895. Grand Rapids, Michigan: Wm. B. Eerdmans, 2000.

---. *Phantastes*. 1858. Ed. John Pennington and Roderick McGillis. Hamden, CT: Winged Lion, 2007.

---. *Unspoken Sermons: Series I, II, and III*. N. p. : Nu Vision, 2009.

McGillis, Roderick. “Introduction” *The Princess and the Goblin and The Princess and Curdie*.

Ed. Roderick McGillis. Oxford: Oxford UP, 1990.

松村一男・森雅子・沖田瑞穂編『世界女神大事典』東京：原書房、2008 年。

Michie, Helena. *The Flesh Made Word: Female Figures and Women's Bodies*. NY: Oxford UP, 1987.

Mitchell, Sally. *The New Girl: Girls' Culture in England, 1880-1915*. NY: Colombia UP, 1995.

Patterson, Nancy-Lou. “Kore Motifs in *The Princess and the Goblin*.” *For the Childlike: George MacDonald's Fantasies for Children*. Ed. Roderick McGillis. Metuchen, N.J: The Children's Literature Association and The Scarecrow Press, Inc., 1992. 169-82.

Prickett, Stephen. *Victorian Fantasy*. Waco, Texas: Baylor UP, 2005.

Raeper, William. *George MacDonald*. Tring: Lion, 1987.

Reiter, Geoffrey. ““Travelling Beastward”: George MacDonald's *Princess* Books and Late Victorian Supernatural Degeneration Fiction.” *George MacDonald: Literary Heritage and Heirs*. Ed. Roderick McGillis. Wayne: Zossima, 2008. 217-26.

Rich, Adrienne. *Of Woman Born*. NY: Norton, 1995.

Soto, Fernando. “Kore Motifs in the *Princess* Books: Mythic Threads Between Irene and

- Eiriny's." *George MacDonald: Literary Heritage and Heirs*. Ed. Roderick McGillis. Wayne: Zossima, 2008. 65-81.
- Tolkien, J. R. R. "On Fairy Stories." 1964 *Tree and Leaf*. London: Harper, 2001. 1-81.
- Willis, Lesley. "'Born Again': The Metamorphosis of Irene in George MacDonald's *The Princess and the Goblin*." *Scottish Literary Journal*. 12. 1 (1985): 24-39.
- Wing Bo Tsuo, Anna. "Transgression in the Gender Representation in MacDonald's *Princess Books*." *International Journal of Early Childhood*. 39, 2 (2007): 11-21.
- Wolff, Robert Lee. *The Golden Key: A Study of the Fiction of George MacDonald*. New Haven: Yale UP, 1961.